深川之巻　人

へ5
1793

へ 5
1793
巻

此度の棊遊に於て今のあまりし
ゐ嵐に筆とりて扇家の永きを
長延すこと爰のたま仰葉おく
芝をかを招とく囲みて軟株比
松梅と桂をとありれいて此の義を
鍾めんとの諸様あつらへの

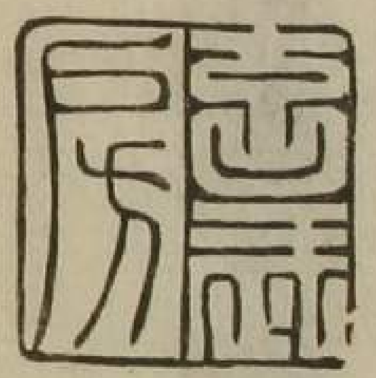
1793
特 へ ら 1793

梅の香りかくて玉の光りに逢ひえ
我よりはなをあやかりて

高武房

さめの〻盆く春や

うつれ梅は花かな



梅花佛鑑塔再建供養拈香

陞坐

拈香曰

威音那畔無根樹
不渉榮枯與寰還
觸着衲僧辛辣手
博山炉上作龍涎

鈎語

無譜一曲　千聖不傳

聽流鶯語　莫作杜鵑　參

問答不錄

提綱

一句圓鑑　覿露巖然

徧亘塵刹而無法不明

桃紅燃暮雨

高懸沙界而無物不照

李白發朝烟

剔起眉毛遮加羅眼不見影跡

勤着心念舜若多神無測涯邊

磨礱來也　芭蕉翁羽労拂拭手

折破去也　梅花佛揮擊碎拳

收則全歸方寸

展則早陽大千

是故

竺土黄面老説圓説方

千年滞貨

鎮州白拈賊行棒下喝

古家旧壇

拈杖曰

言求説同行木上坐叉手進前云

休休好事不似無莫淡閑言詮

直分妍醜正衣襟底之一句作麼

生布宣去阜一阜

水流之入海

月落不離天

散説

薩訶世界南贍部州大日本国

武蔵州豊嶋郡白山下居住参

学徒一碗亭主人數輩門人同誠
志明和六己丑歳三月十六日伏值
梅花佛忌辰就于臨川精舎運轉
淨財荘嚴道場令十有余員之
諸禪侶勤修諸般白業命石工
造立一基鑑塔請山野讃揚佛
徳舉揚宗乘至矣盡矣

梅花佛　心徳不惑胸襟無疑

超越群機　不屈膝於王侯貴介
誘引諸子　被與名於車牽童兒
甚希有　甚希有
也太奇　也太奇
欺白居易帰兜率宮　高哉地位
笑黄庭堅墮泥犂獄　卓爾天姿

到這裡
全無菩提之可證
寧有生死之應離
行無町畦　山花開澗水湛
情不汚染　江月照松風吹
如上
梅花佛從前受用活三昧也今日
別門葉達中述宗之微妙句作筆

供養一碗主人編集題深川之會
槿花夕陽之句
芦中池塘之詩
自序
小賣弄渓　叨説妄禅
汚獅子坐　流鉢拈涎
慚汗々々
惣謝

陞坐次共惟滿堂現前雖兄雖弟
人々如百千日月遶須彌
箇々似一万丈波瀾歸大海
嗚呼盛大矣
記得稽山章在投子會下為柴頭投
子一日與茶乃曰森羅万象總在這
裡許柴頭潑却茶曰森羅万象在什
麼處投子曰可惜一碗茶投子病不能
死稽山不病不能活當山開山佛頂禪
師不干病不病為芭蕉翁擧示與
茶因縁翁言下有省山野即今投
子稽山佛頂芭蕉底姑舍欽白衣
右諸大德森羅万象在什麼處
請各々道將一句来
下語不録

左右各〻好ニ言語ヲ
我亦折ニ一偈ヲ

燕語鶯嚴春日長シ
樓臺倒影入ニ池塘ニ
現成公案藏ルニ無シ地
天下閑人喜フ不常

華園末枝
東都牛門埜納
般大泉叟

長斎行

臨川寺現住
堀井

咲ものは望月台の竹に塚　祇尹

あふけは高し梅の都に　歎雪

たちはなのあけほの都に雲かゝく　為胤

池の汀をあゆみよる沓　立泉

錦木の評判に泉をなかしつゝ　丈之

巨雄まかせておほさかれし　巨雄

宵ちかく雪の山にをのこ有　吉節

淵ちる音をもす雲の音　純迪

たま遠の山寺いそくにしの空　湖水

秋のまくれに嘆もはちらふ　丸賛

まう信乃もまはゝ天徳定めをやる　紫谷

桃灯ほともる西へ入りけり　竹尾

婦りゑる形たる一句ありて色　逗居

風よ折戸の為を結ひ　風和

亭からに菜を干す書院り　如舟
多賀の出わりさ月も九つ　先二
河原にて廿日の供の取りえり　班嶽
尼をとらえて里の家市　杜文
行もやらず段々延びて味噌なき　梅十
影も絹かれ月の行程　閑之
秋の涼くらくてぬれてり　九詩
庵の切者にあかり霞り　云荷

二

あらたまに粥の雲の声聞いて　千寿
彼岸の庭をとくとく洗洗　和布
縁に花風に揺めく室の雨戸し　洗耳
丸工も銘酒をいりふ延徳　洗河
菓子とて盃枝の揺みかへ　洗溪
三味川に流す布施の菜用　洗車
いさめの春を張る恥大黒　洗鉏
松のゐりぬ継母の宝見　洗布

年のうちに掛乞て寝かゝり　扇柳
舞ひ乙てあけたら花のさかんく　柳外
うらゝかに雲雀にさかりかけとき　此雲
市日の鳥やら鳥も居つるを　五日市 薫梅
唐物の諸事に関の隷代で　梅志
錢を継れて下総まで　金沢 淡水
雨もよに脇坂負けそうに　紫雨
挟しるんそつて若ちるを答　柳与

名月の光ほと添ふてそふれ　諸川
さいつく障子の秋に身を寄せ　梅右
一ウ
玉かつく巾役摘にかゝる　塩玖
身なる嫁しとられてかなる　紫雲
お祭に寝を掛置小溜を　山暁
こゝらして落てたもりく　梅坂
在郷く道を手向あらん侘れ　治石
紀念し見る花ほとの頃　下総 浮世

深川よりかよ三笠の花咲て　風切

縁側の春といのり暁　志郎坊

名月や春きみえて稲の波　雀山公

春風もうれて柳の糸の郁　梅郁公

家の玉よ酒りん為そ京とし綾　風一公

三やけるをかしまき牡丹花　三嘆君

四季混雑

梅かゞや宗のね都よ流を来り　風切

雪報中うりとあらま新春　麩雪

霞の戸よ酒え唐紅る　百工

風ふらくとりうえて一家る　少巴

菜ばなのえんりなれ宗の花細　雲車

夕ゐのまるみ春雨もみるるに　嵐池

塔ひとつ紅葉からの花の宮川　素色
一もみぢ身に染あらし山あけさは　好風
有明やまさに雪を揃ふかな　業房
松杉にかゝりてかくれてかゝらぬか　諸川
行ゝぬれ橋くもりかゝるへ　かな　信古
山里や種を焼き出きりこうか　千春
初霜やまどろむゆゑかくさくり　桃芳
あさきさてもるや神かくし月の人　定之

月の晴ちるあり帰の人　素楊
むらの縁めしまゝおぼろ月　赤子
山吹や春より垣に咲きかれ　此岡
咲も山もおこるに如しふの月　兼笠
庭のけしき花も藤や春の雪　冬布
背戸に待ちまうけ来る梅の花　菁雨
文塚の梅もうぐひすやれのうれ　柳子
きぬけても花に鶯咲かる茶の香　武月

夕暮やあ[illegible]のあまに帰るもし　為嵐

川竹の[illegible]や芦[illegible]こゝろの　汲道

若葉にも[illegible]かきくれよろしかれ　白米

蝶しも春のつれや[illegible]以雲　波常

橋に[illegible]花のちゝりも[illegible]かは　茶恵

入相のきりに　橋も[illegible]千な　安之

[illegible]かとゝ[illegible]もれる[illegible]ゆるか　純廻

風の色を川て[illegible]ふ[illegible]雨[illegible]は　紫岩

芦蘆や花[illegible]のちれもおそて咲く　花[illegible]

[illegible]にも垣根のあれもよる[illegible]　風涼

[illegible]人と来て　[illegible]出[illegible]るか　逸己

吹あけて[illegible]にまあり[illegible]は　無秋

[illegible]山のちる[illegible]しおは[illegible]　雨[illegible]

童白や春雨のるに一二編　水光

風吹て[illegible]にかゝる[illegible]も[illegible]　一[illegible]

芦ろう何え[illegible]てやり[illegible]子　之[illegible]

湖くまうけしてわくちるル　湖月

宗よまく出さへ宗て秋宗うか　玉泉

うへ秋や熊とみよ月を鳴踊り　和枝

竹器よ足清出まきを清出さル　雨光

覚うもえのゆんすり宗うくは　山楊

蔓物のまもき丸しうよ地ぶかれ　女　麻衣

うひまや梅をゆさう居出うは　千重

清川山うしと蟹も居城の清出さル　紫楊

うらんまうえてよま居りやみとの梅　玉卜

谷鏡の家の桜かり雪も花や百年生　清月

春の波とみやうふみりおもるうか　古国

三河うういく桜ゆすくうみれりく　芳郷

冬うかのまておりし滝し梅の花　湖笑

涼風も猪川てもくま田うぶ　竹尾

海とまれ中うう東川や麦の秋　巴居

山しくとかゝくてまれや雲の峯　風和

ほとゝぎす一声の行衛や山のかなた　波橋

れ竹も汗に蒲団の庭さへは　雲蝠

秋く柳もなし　綿の花　花詠

塚の菜のあからかりし露つゆは　梅左

行衛さへ深き宿で夜の雪　花菊

弟子なに咲かはし庭なは　雨石

おもふもこそよろつの庭の露　空仙

海さむしうきや背戸の菜の花け　桃之

はなうさてそなれぬ山や雪の宿　岩雪

鴬の声さあけかおぼれは　也メ

鳩りうえりそれしえれをおほろ月　廿　女工

白菊や溺るゝ霧に沈えり　女枝

雌雄のかゝれ風に咲くゝり露の舞　廿　杜魚

その浦のやまと指られし菜の花　一童

鳩みえ寝く梅のしれやそのあさ　九之

花く萩の砂人ゝさむ雪えうれ　柳梅

室梅やさゝる楽にも一二ゑん　西牟
誰出やよるもきらめ小言来　雪洞
蕎ゐうと肉を煮あり様かな　南北
また鶴に似たるはなさやさしの人　何来
秋山あくらのみあらぬ秋の月　先二
鶴声や冬の寒に穂の沈て辛く　仏路
入れもうるる宇の見えるかな　鶴了
暮ぬる小家にもえる川柳の月　棟遊

[illegible]　白花
足ら[illegible]　梅[illegible]
植[illegible]田に　虎秋
[illegible]のあ[illegible]梅のむ　[illegible]
[illegible]やりうふ舟の[illegible]　[illegible]
梅咲や[illegible]の[illegible]　秋史
[illegible]　梅十
[illegible]や[illegible]風[illegible]月　蕪[illegible]

鉢点の一枝をあつきはなれ作 五諾

あらしの月をあり小雲原 田鶴

雅子かくれて巣つくるかよ長聖作 寒雅

星うらもとうふ橋のかゝうか 淋水

芹畠に近道のまて雪解作 栄紫

永夜の新茶お振るに見ゆ哉 東芳

かさ年を捨るを見ゆ了の人 洗阜

卯月や月まんゐふらの花つめしき 洗河

手向しを嘆てゑせぬりうへ哉 洗治

先れも名れありや紙鶴 洗車

錦点や嘆お名れて下りさせみれ 洗是

あへそ名れ汐るりとえゑる哉作 洗鎧

そうゝく風もうこう夜雪の字 洗布

楠嘆や細ふ下括の添えうり 洗存

添うをお何てうるやかしの柄 女 洗葉

川うめる淀もおかし五月雨 洗瑶

ひんねりてもてるやふあるちる木槿　沾笑

冬まつゆんとて下葛のそこまでる　沾年

芦の穂や鴫もむさら鳴るぞて　沾橘

うつりうらんてもなを　蕣うかぶ　存柳

御秋や茅ぶきて人の　菊の露　霜笠

あら錦やちりもむすめの紅葉かな　存九

工ちくも風ふきつく　柳うかぶ　柳雨

秋の日にかゝるまさかし　露の玉　希兆

淡雪や鴬の声うすく深くなり　東武

まくらの外と見せかし　秋の月　鳥暁

振かはもよみしたゝめて春の梅　柳水

いつつあの世をゆかへし　枯尾花　此雲

帰京をも一日の名なる舟　寔梅

夕立や日傘をすてて傘の露　虎切

秋雨をあがりけるかなし　夕涼　雲古

梅らゆく涼をさす雨桜うかぶ　沾盈

葉のみをひ所ゝや　はこけ尾　長人 象峨

みちの風やさそうれて取り寄る御けり哉　ツカル 巴竹

笠振てかけと寄あり　さば　年ほ 嶽多

床年ちと又かのを哉　あれ　五日市 嵩峯

猫らんきや菊寄り気も起きけり　雉琢

一かれ水もきえて　や雨き　ば　業石

お伐りや　くしく下よ　もり　里喜

一雲　ゆ　い　雨かり　木の寄りか　梅志

杉ひろふや踏うつ　来て居けり　川仲 竜兎

清のく寄る　きり　まゆ　梅雪

ころふ花や池清を好む　此けり　補川 梅洲

花の名を寄香よ　や　花　釿井 和亂

氷ほや　ふる　哉　そうぬ　けり　吳谷

あるうかれ　ほ　の　く　あ　色　哉　十出

竹の子や　御れ　もか　け中　風竹

初雪や　寄りも　清　寄　哉　紙尹児 文喜堂

諸国集類

ちるぬるとちりて涼しさ御しられ　江戸坊

きらしさのさく家のまてへかな　風竹

かくやしと春もあかりけや梅の花　董中

鶯よりおそきあかる猪の声　清秀

秋の夜のゆひそかさなる秋の月　梅二

秋もりふみ節あけて一夜ふかし　京武 宗路

ちりしいのかなくれて御けれて　素雪

何物をおくしたちの色　むね 北方

やまきの原てえもあり秋の月　定言

逢ひそむ殿おもて夜は　京湖

名月や池にも雲の影さして　露宗

正月もいちろひらき曲免の花　山紙

名月や花の暗より菊の香　くの

文月とのうしはかなかゝらハ　自化
あけ時に二夜しこしけり月霞　山暁
替てこそ素通りてみるかな　風好
月見や家を明けハ淋しく　種雨
三絃や月夜ぬけゆく一夜かな　除風
花をみるも蕎の花見るかな　白兎
むつかしく細きつとよう哉　吉浦
きてんけはかなくてあゆくさ山路かな　紫阜

長雨やえた五日山のうれとしか　うな
いつとなくも咲きて咲く日和かな　呂竹
大ぞらをおりてもあるし市の雪　嵐示
ありしこえとるもありし雲の露　花人
蕎や流きかれに水の音　花葉
涅槃会や出筵と捨ましかな　凡化
春しはらくみ棹けるかはらふ哉　如風
蕎やえわけて点ねてきて哉　風竹

菜にかりつくありさや蝶めぐる　鶴老

日の中のありさハまつく夕ざくら　蒼用

見るうちにうれ柳　おれおほ朧月　布川

初嵐も女子そうりを桃の花　枝風

うぐひすを糸にさかぬうちハうぐひす　孤舟

鮎のしてりわいおて白くあけぼの　堀言

花の雨や名月ふくりて家の雲　又言

春雨の扣したまひかし蒼茶いくわ　全津　律雪

日の恩の暮らうへそく桜うらめ　師若　和泉

七夕や餅よつくのはねの香ぞ　イセ　素士

あれ庵に雲の合羽そやけふの月　帆十

青柳や日よし氷の御て来り　回許

雲のたのあけぼのうぐしそれの人　ヲハリ　也方

五月雨くははちちれく流れかな　カヽ　柴園

名月の影を梅の花　板石

花散りし鐘の音やその雨　如笛

春雨や浦吹ちらしてみし花　しなの国　芳川

雪ちりしあと見えて花川は　之ノ　元水

梅咲それや久しからずて雲の色　里仲

雲の出よ　猫鳴その　にわか水　花流

横雲や　狩川そへてわたる波　宗桐

ころり山や　時雨や蓮も花のくく　杜若

十六かへりてえし年の坂　笹子

流しきや　宗の味つく雪のうく　京　松花

御所や菊の下かく蘭もあり　玉晁

宝舟や錦ある色を見そへて　ハリマ　東頼

折れ木かくして万枝や　梅の花　紀州　風好

七草や一色ごとの水加減　ならえ　為子

ちれもうと　幾度あそびてあはれ　喜和

あれこそあるを　はりてもよいかな　百園

畑中の梅や　すまし水も払うて　和舟

余の木入も冨来くなりや　梅の花　連坡

一碗もの名ちの戸に出てくる霜を出して
それの花まとるさに出て

稲かけは和　遠やかけるお陰　元来

一夢をまくれしかりけるお使　紫鳥

出暗ぬ　稲めてし　青の山　乙山

まくとりん　風の葉うとなるで　雪窓

秋か時と　鳴あれ哉とれ　霧かな　フレコ 芙蓉

海棠や名高きと　出の花のと　遠士

声の出やかふさふし帰もさとかけ　悦花

そよかせに風とあれふおもかけ　英五

石に笠てくさ寄る鶴かな　吾柳

年て衆俗の旅にあきふ後えな　池雨

秋をとる　おなさいかな　一ふかん　吾竹

山かれぬ　心の出りいやかなかける　栄芦

石垣に　昨りそて　そんほうん　鋤子

柳かなもくれぬ　めくちかに　赤星

おの衆も　やうかさや　嫁の人　斗石

ちりくと京も田舎や桃の花　南玉

引寄や酒の香しみる桜の紙　梅伝

はゐのりちや民をも宿しそめくらり　粲笠

蚕煮やおのゝ葉氣もきぬるき　文荘

初月夜や車井もよのそく浄　東瓜坊

春しけや席入る手の人形あまる　伊勢 白露

雑竹やふらるるゝ秋の鳴　伊人三 睫觥

若くるゝ花の日をしき月ちかど　比丁 碩菜

うれていまきてあゆて氷枕かな　安濃 丁画

ありもろの月と綿やかりひろり　周防 壺介

秋仕舞ら夜の空の星めかぬかな　作州 作兮

ありしみ夜をゆり宿りし桂柳　作梁

菜月と借覧のまるそうし住田　以兆

瓢ろ月やつるぬ鋏ねのうろりへし　亀休

乏るやゆりをもて蓑のさあぬらら　日光 鯉香坊

ありまかてちりをらうやかなる楽の色　信州 宸竹

月ほとり経ぬりける枝葉うなれ　知来

花折るに紅葉かけて姥ざくらぬ　家佐

みつゝのむら稲ほし名月空　竹外

渡して乍らのかゝる秋の名然　勢晋

みなみのむらのこゝろひや月の頭　柳居

明ゆひらや海萍なかうのなかう　汶洲

うみのちと戸をゆすぶる夜の雪　之紅

あかつき宵戸や客人のあやめかり　李明

出水や尾花の流しの頭渡る　應水

秋にの夕まあきや柱ひく　有清

雲の峯さえつゝ山のしのら　枝貴

江戸と一節あけて早わかれ　望石

山中や流水にちかき人あつ　来的

稲ほす庵深く冬の月　素静

梅のゝの和らか梅の卯　一色

雨の日も行の家もなかしら　従鶯

尼も猫よりを鈴虫や寒しられ　素丸

三日月の影ひく尾を流れけり　玉獅

雲白ふ中に寺あり山紅葉　諸兵

悠ちけも遠近にや山しられ　彦糸

流れ込むとまくあかりや行あかし　東里

新らしき影を涼むを稲の縁　文居

庵のあれも秋風なし世もつるる木　石鼓

立ちても行かぬ夜やおはる月　桃谷

銘花の影もそよそよゑみ川の床　寛柳

月毛の脛をぬけてやんたかたん　英雲

七浦の夏をそよし五月夜あれ　桃花

涼き宵や七の指ろりのみ川　一笑

山はけや月にかゝふ瀬その花　風里

鶴の雲　嘆ちく　霧の霞　梅枝坊

京緑の雲を見しよみふの月　柳沢

市急の月くるまきり　あられかな　梅石

若竹やきのふ見ぬ間の青　九皐

さゝりてちりかゝる秋の声　了仙

卯の花や夜ふかきと窓あて空　雅吉

堀細しのさめてや柳の露そ　文路

さてもの袂わか身がらし秋の日　信之

庵錆きて千鶴の声くさかへ　青路

かきさらて小雲みとよむかふ　花之

あかつきは風かはえる田井ろか　古梅

春さあさく去も来て鴨く枯野哉　比楽

さとりて行月と雨く風も声あれ　比柳

夜寒や空りと每の灯く青　東希

待宵や行かりてあふて涼と雲く　紫雲

ひとつあと大柳枝よりかゝ流し　淡家

春や精舟の底とうけて帰く　可枝

雲さりの子色の色りや戸の月　素中

うくひすや價のあれぬ弱くかり　吉風

御あらふ人あらかし杜若　芦江
借枕のお清くたゝみ紅葉かな　東寧
落ちるさまく霊鬼に鳴る丁　渓流
咲そらふ庭のてうちはれふるかな　鹿鶴
湖や手かくも分くしられける　言柳
梅さくや雨も若後に香るさ　牧牛
梅か香や新の霜のかハくまき　可好
ちり客かな咲かのかなしみ給かん　好ぬ坊

横雲御簾風に星の飾康かな　鳥宇
柳もも露色を手よりや雨の月　呉雪
萩入や咲けもえてくる新　東舟
下戸もまたの留りやりけるかれ　筆路
うぶ衣のまた色々の菓子に雪こく　紹外
来らしろふ組又よまうやくに梅の花　篁松
元先の雪と閉らて花らく屁の花　地船
うき憑ともえて遭ひく鴨舟かな　玉亭

よ高みめると移りなれしてうすきかな　篠之
七夕や出すはこの若さ星の空　千丈
汐濱のおのれし分てかよふかな　琶貉
ふかしさよ橋をそえて寄せ来ぬ　二米
細井やりふる九の後えしえ　帆堂
浮てむく夕日や水にかよつさ　二雲
水くさひさうやかてつく楽子の空　真手
唯きく日中に生物の白ひうち　緑森

草のかしおもふ枝かよ御ゆかり　川柳
広ひすゝとゆるもかりれを田播る　志柳
涼風の手ゆるゝ夜をあそ九　冬雪
飴か日の垣あかさえてりふの空　竟雄
此浜やふるえく甘みりふの月　石蓮
出てゐの雛のおゐに送りち　柳之
ふるの御あか名まと人うき郁られ　廉枝
うつりのありさくえうぬ幟かな　文?

きよ川にかるゝもえて尺雪の跡　丈几

妙おけは文殊也のしられうか　修竹

春らしくしえんかうかさの香　湖江

行ちりはあしも定しかえりたち　李井

その戸の笑人お羽るやおほろ月　棕仙

梅咲や春の山路を落つかれ　竹杖坊

撰者

卯の花や雨にも雪のまりは色　汶尹

村雨や羽上下まあれるもし

鶯やれよ咲かれく霧とわるる　五京

いそれとなきも川くつく　ゐせ京

跋

此一集ハ六男一號の器の得をて延享の春秋
に對して諸家の標目をしるし一篇の帰鏡
とするに千化のむかしとさへふあらぬる雪月の記録を
ありて遠近の通志を鈔とせしらのいまさ出あぬに
寛暦の史笑ありて經境祠堂まく焼却せしを
その趣の遠ふことおそれてまた再建とするをもるらの

志けくまつ為にあつしきつおもし加へし江都師坊風葉
高師由で傳うる小濱師能林の字ちうへ一笔師の
正しよ濱出不行の前後をしらすすて十人にあまり
如是れ中る宝と當り宝中前師と氣師と莫延此
京雅ハ不も文と謝ふ宝林の信意をなし尤十七家の
門葉を継ぎして并に十一ヶ紀と語意しるの紙記
圓の志とえこうれしにせ人さもこの四月の末に男
得とめとかよ見るらの経の文くに物の様子とし

あひて去らくれよと賑りからなく所にむなしく
杢ふもまゝてその上ふ詠草の曉を朝よりの梅と櫻
物の係人と習とひ出るよりあわしきの上に
明和の頃より安永の時分ても門徒の衆あまたまでを
俳諧の法式のことをよりて諸門の大法をなし
そこらの害尓と何ゆふあらむと師よ経と學し
あらは時節よ此教を顯して永く後来の門人と化經
あるよ思ひたる獅子門の諸謝何ら又よりたるまゝん

それもると再撰の発句をして諸家に門室の弟
関よるあへ今の本言の語りんことをかれてに懸
若子をおよの日記えり仰あ氣かくれよりふ年月の
差ゆり此名流の門るゝから追古人の教をひて衛く
俳道のちからり此時よきり仰をえり奥おふ人れて
正衛を悟あるし其後師と同と眠りて死後の
俳諧よあるへて此俳道とむてそれもかえりて寸心の
諸子よ思ひたるしさふへの俳諧の亡にまるる勿論

まれにしたるこれ名の風雅と称せんとするとて海名
とつてみんも他の口身をかりん所よ我風よきの称
及ばざる所あるの器量を為すも論じ置きたるとするの
君子よ今昨年十月の末不意ふる命をさと盃ニ
書き宗匠の所号を以て家流の道統なると也ん
まもや逢佛殺佛逢祖殺祖と也言して侍るの
流法を継道せんとする事也一家下に流派
の作る師家もなしかなされけり又五ヶ年を経
まつまつ流の半ば継承の企あるとなりて一家の
流派も出来されかく自己の近惑もなつてん流派多く
しく流株よ之を云ふ器者の名を以て尊ふとかくの意
し

明和己丑仲春

画中園

五葉ふ